

# 青森雪月花

青木 裕次

**昨**年、私は県立高校を退職して再び就職したが、実は退職と同時に東京へ転居する予定であった。これは若い時からの望みで、五年ほど前から東京の不動産屋に物件を探して貰っていた。希望に叶う所が見付かったのは退職を三ヶ月後に控えた十二月。即、購入した。同じ頃、県内のある方から退職後は是非当方へおいで頂きたいとの話を受けた。わざわざ出向いてこられたその気持ちを汲むことにしたが、長くは勤められないと言い添えた。退職翌日から新たな所へ通勤。朝から夕刻までの常勤である。その上、様々な行事などで土日も潰れた。退職後にやるべきことがある。自分に与えられたこれからの時を何にかけるべきなのか。密度濃く生きるこの大切さを殊更に悟った。この仕事は今年度限りで辞めようと思いついたのは六月半ばであるが、職場では大層興味深い人間模様に見入った一年でもあった。定年後一年を経て私は漸く東京へ転居する。その時期を五月の連休明けと定めた。

**先**の冬は豪雪であった。屋根に融雪の電気を通しているが、連日の風雪よって出来た雪庇には殆どその効果がない。青森の我が家は北と東側が道路に面していて、屋根につく雪庇が道路に落ちる危険がある。万一通行人に怪我をさせてはならないという一心で、雪が積もる屋根に幾度となく上った。テレビや新聞などで、雪下ろし中の事故で怪我や死亡する人が多いと報道されていた。最大限の注意を払った。また雪捨て場にも難儀した。東京に出れば豪雪に悩まされることはない。映画「ベニスに死す」だったと思う。ロシア出身の没落貴族の台詞が忘れられない。「ロシアにいた時は雪の猛威を恐ろしいと思ったが、此処で暮らしていると、その恐ろしい雪でさえ懐かしい」

細部は忘れたがそんな意味合いだった。東京で暮らすうちに、きっと私は雪に苦しめられた青森の冬を懐かしむことになるだろう。雪と言えば私には、容赦なく降り続く青森のあの豪雪なのである。

**在**職中三年間、私は八戸中央高等学校に勤務した。そこは定時制高等学校の独立校で県南地方における定通教育の要たる学校である。赴任したその年から三部制が始まった。三部制とは午前部・午後部・夜間部の三部で授業がなされる形態である。単身赴任であり、また夜間部では完全給食もあることから、私は毎日朝八時頃から夜の九時過ぎまで勤務した。生徒達の帰宅を確認し真っ暗になった校舎を出て、夜空に浮かぶ月を眺めながら帰路につくのが日課だった。特に秋の月華は清らかに冴え渡り私の胸にキーンと共鳴した。この八戸中央高等学校の校歌の一節に「くもりなき 月の色みよ」と言う一文がある。この世の万物を遍く照らす月ではあるが、私にとって月と言えば、八戸で見たあの秋月が沈々と思い出されるのである。

**弘**前の桜は、何処の桜にも勝るとも劣らぬ見事さである。満開の桜に囲まれた点景のような天守閣と下馬橋、西堀の水面に映る夜桜の妖艶にして徒ならぬ美しさ。外堀にかかる爛漫の桜、本丸の枝垂れ桜の雅。そして桜木のその多さよ。弘前の桜を見ずして桜を語るべからずなどと、豪語したくなるような桜の一大スペクタクルである。東京への転居を五月の連休明けと定めたのは、退職後の新たな門出を、津軽の桜に見送って欲しいからである。日本人は古来から桜花の中でまた再生する。花と言えば、私の思いは弘前の桜に走るのである。

青森雪月花。それは正に私が今在るための原風景だと深く思う。  
 (元青森県立北斗高校校長)